

詩集
新體

岩野泡鳴著

悲戀悲歌

東京

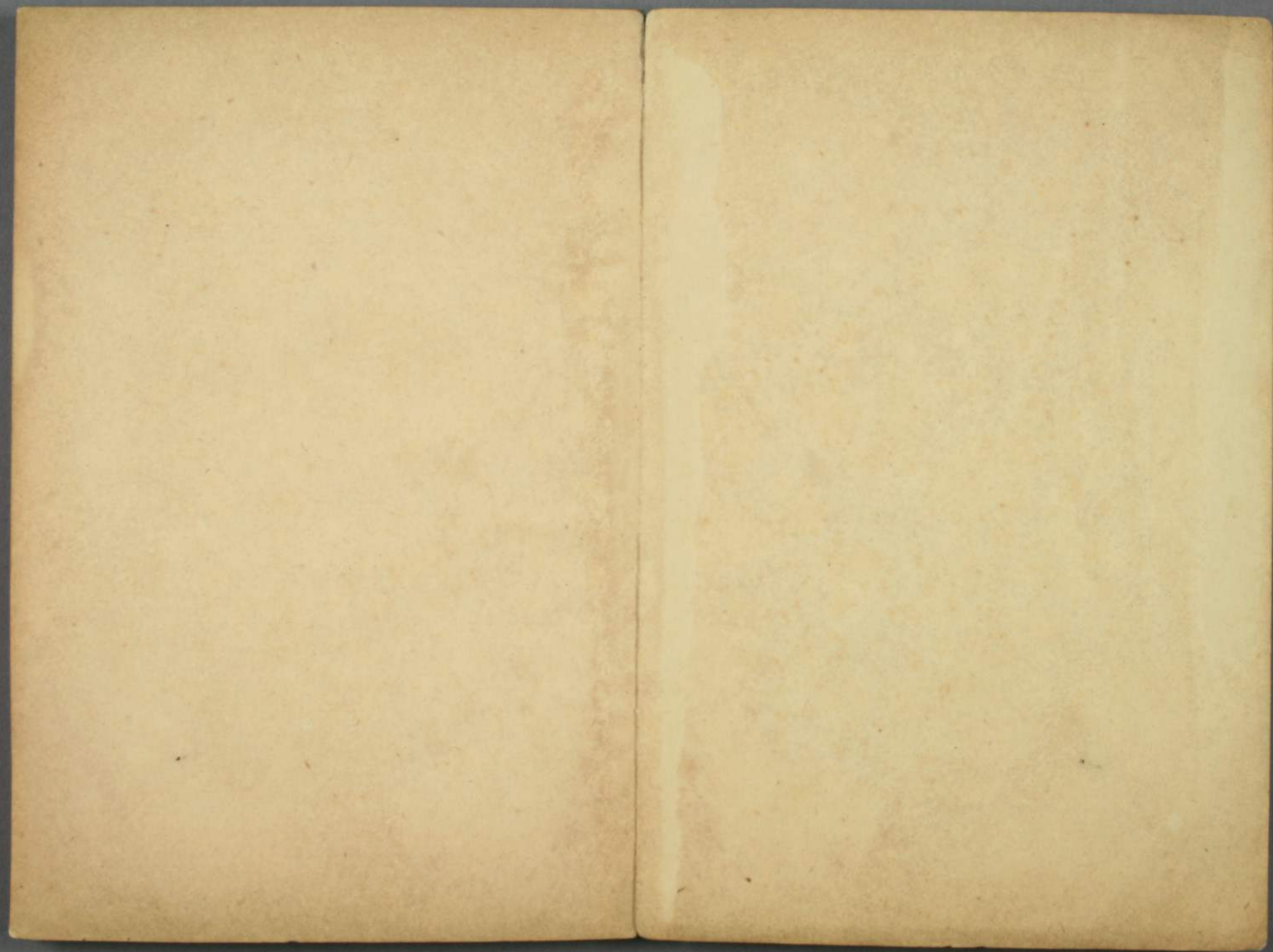
日高有隣堂藏版

悲戀悲歌

岩野泡鳴著



鏡
齋
居士
如
香
生



125.

悲戀悲歌

岩野泡鳴作



『田戸の海ぬし』の詩材を給へる婦人に、

この著の全部を献じ、

同窓の畏友北村季晴君に、

附録『脱營兵』を献す。

目次

三界獨白

- 一 燭のゆらぎ……………一
- 二 闇の横木……………一四
- 三 ときはの泉……………二六
- 血ぬれる鐘……………三六
- 田戸の海ぬし……………四九
- 高地の靈話……………五九
- 旭日吟……………六五

伊吹の螢……………	八六
螢を踏みつぶせる折に……………	九〇
雲翳々……………	九四
常世の光……………	九八
ねむりは醒めたり……………	一〇〇
ソネット……………	一〇四
一 海の響……………	一〇六
二 無言の石……………	一〇八
三 自然のあゆみ……………	一一〇

四 残る憂ひ……………	一一二
五 細き指輪……………	一一四
六 夢の子……………	一一六
七 薫ゆる火かけ……………	一二八
八 とはの寂しみ……………	一二〇
九 榎の木……………	一二二
十 小暗き道……………	一二四
十一 まとふ怖れ……………	一二六
十二 うれひ一筋……………	一二八
十三 時劫の森かげ……………	一三〇

十四	いさゝ聲……………	一三二
十五	鍵を與へよ……………	一三四
十六	鏡を碎けよ……………	一三六
十七	蛇の河姥……………	一三八
十八	熱き真砂……………	一四〇
十九	酒興……………	一四二
二十	悲哀の俘……………	一四四
廿一	苦悶の鎖……………	一四六
	脱營兵(叙事小曲)……………	一四九

悲戀悲歌



岩野泡鳴 著

三界獨白

(一) 燭のゆらぎ

あゝ、君、わが愛、悲しき愛の
 御たねをさそひて春は過ぎぬ

三月の樂み、その悲みは
若葉のかげろふ、野邊に過ぎぬ。
うらゝかなる日は再び見えす、
遠きにのこるは聖堂すがた、
そびゆるあらしぎ時鐘を鳴らし、
あしたの祈禱に呼ぶも恐怖。

二

罪なきものらはころもを飾り、
こわねも高らかに石段をのぼり、
二

ああ、うらやましき乙女のさまや——
聖母を唱へて席にすはり、
やましきことなく、隔つる意なく、
かれらは聖式の蒸餅を取れど、
わが身やエヴの子——妖蛇に捲かれ、
ゆふべの祈禱も口に出不す。

三

見よ、かのカインはその弟を
うらみて殺せし罪に由りて、

耕す土さへその果を擧げず、
流浪の身としもくだらぬれど、
なほ且ゼボヴの印誌を給びて、
さすらふ野邊にも子をば得たり。
わが身は却てわが分身を、
神にも見せず、闇に遣りぬ。

四

ああ、闇——わが魂なやめる闇は、
わが目を閉してわれを責むる。

こゝろの窓よりたまさか見えて
ひろがる大地は聲を叫び、
血しほに染みたるその口開けて、
わが身を、罪をも、呑まんとする。
われにはゼボヴを呼ぶちからなし、
ああ、君、わが身は尼を斷念ぬ。

五

一たびこの身に纏ひはせん
のぞみし黒衣は、こゝろ包み、

見ぬ子の かつみ の 喪服 と 成りて、
わが 苦み こそ 神 と 盡さね。
老いたる 主教 は あまりに 聖く、
親しき 童貞 なみだ もろし。
光 を 受けたる 萬物の うちに、
この罪 聴く者 ひとり 君ぞ。

六

君より ひそかに 懺悔 を せよ の
招きに 断食 — 朝 を 來たり、

をみな の 恥辱 をば おほへる 被衣
白きに 隠れて、 彌撒 を 拜す。
たふとき かをり は 御堂 に 満ちて、
高き を 落ち來る 樂 の ひゞき —
わが魂 うつらに うれひ を 免れ、
まさしく 向ふ ぞ 神 の 御前。

七

ひたすら 唱ふる 誦文 の 聲も、
うなじ とも 共 低く 下だり、

十字^{じふじ}を結^{むす}べる小胸^{せうちゆう}を過^すぎて、
わが世^よは地獄^{ぢごく}の門^{かど}にかよふ。
見^みよ、聖^{せい}ミカエル、またガブリエル、
魔鬼^{まき}をば平^{たい}らげ、道^{みち}を拓^{ひら}き、
天^{てん}より招^{まね}くは耶蘇^{イエズス}の御體^{みたい}、
榮光^{さかえ}は金色^{こんじき}——これや犠牲^{ぎせい}。

八

「生^いきたる人^{ひと}、また、死^ししたる人^{ひと}を
糺^{ただ}さん爲^ためにぞあもり給^{たま}ふ……」

われらは信^{しん}せり、この公^{カトリカ}の
聖會^{せいぐわい}、聖人^{せいじん}……罪^{つみ}のゆるし……」
こは聴^きき慣^なれてし御聲^{みこゑ}と知^しりて、
ふと目^めをあぐれば、思^{おも}はざりき——
わが君^{きみ}、神父^{しんぷ}のくらゐにありて、
香臺^{かうだい}ひだりにひざまづけり。

九

立ちたり——その御手^{みて}銀水^{ぎんすい}きよめ、
三つなるペルソナいのり念^{ねん}じ、

いのちに満ちたる秘蹟の蒸餅を
これ聖體とぞさへげ給ふ。
そのかうがうしさ、そのあらたかさ、
われらは思はずかうべ垂れて、
『十字架にかゝりし主の肉身を
をろがみまつる』と口に誦しつ。

一〇

かれ、また葡萄のさかづき揚げて、
われらに誦文を求め給ふ。

われはた唱へぬ、『十字架の上
流させ給へる御血……』ばかり。
わが胸、忽ちいたみに觸れて、
仰げば奥なる燭はゆらぎ、
火かげのもとより見知らぬ嬰兒の
御臺にあらはれ、『母』とるみぬ。

一一

神父のすがたぞいよいよ崇く、
夢路をくゆれる香のうちに、

脊なる十字は光を放ち、
死すべき人とも思ひ寄らず。
さながらキリスト、身づから來まし、
わが爲め御壇に懺悔聽くか。
マリヤの御胎は、ああ、聖かりき——
われゆるわが子は闇に行きぬ。

一二

ああ、君、わが愛、悲しき愛の
御たねをさそひて春は過ぎぬ。

三月の樂み、その悲みは
若葉のかげろふ、野邊に過ぎぬ。
君、聖體をば分けはじめしも、
わが身は授かる價値なくて、
痛傷と悔悟もて御堂を退き、
御空のもとにてわれを泣きぬ。

(二) 闇の横木

一

あゝ、日は毛布の黒みを帯びて、
月また血のごとくしほみ來たり、
あめなる星々その軸もろく、
たとへば無花果、地にぞ落つる。

諸天は巻き物のおのづと巻きて、
山々島々うつり行きぬ。
わが身は鉛のおもりの如く、
空より釣られて闇を下だる。

二

うづ捲く黒雲練りたる壁と、
わが道かこみて魂を送くる。
刹那ぞ五百里、小暗き坑は
風切るいさほひひやくばかり。

あまりに重きはわが身の罪か、
悔ゆるにひまなく鎖延ぶる
かしらの黒がみさかしに垂れて、
わが手も便なく、落つる述し。

三

わが息殆ど胸より絶えて、
血しほはむらがる眉のあたり、
忽ち觸れたる横木を握り、
之にぞすがりて助け呼びぬ。

と見れば、鐵門のなかばは引けて、
ひらめく鬼火に——「あはれ、わが身、
着慣れぬころもの薄きを纏ひ、
こは、早や、他界のすがたなるか。」

四

かくこそ叫びて、思はず泣けば、
「さなり」と闇より答へ聽ゆ。
「いましぞゼゼベル、淫婦の友よ。
額に神より印受けず、

第二の 薄亡に これより 入れや。
來たれ」と、くろがね 戸びら 軋り、
いろ 青ざめたる 馬の脊 高く
乗れる は 利鎌の 黒き死 なり。

五

口より 出づるは 火と その烟、
硫黄の にほひ ぞ 燃わて のぼる。
陰府、その うしろに つき従ひて、
わが目を 掠むる つるぎ あまた。

真近く 起りし もい かづち の
どよみ は 奈落の 底に 消えつ。
あらたに 叫びて、 悪魔の むれの
寄せ來る 地鳴 ぞ 胸に ひやく。

六

われ、身をもだわて、すかれる 棒こそ、
さながら 裁判の 場をや 限る。
『よみなる 判官よ、わが 死の神よ、
しばしの いのちを 許し給へ。』

求むる物あり、われ、そを追ひて、
來りぬこの闇、暗き坑に。
ああ、かの失せにし玉だに得なば
わが身は陶器、碎くまゝぞ。」

七

馬の脊聲あり、「おろかや、いまし、
求むる玉には悪魔まどふ。
邪淫のつちくれさは戀しくば、
來たりてサタンの胎内に入れや。」

かれこそ赤龍、かたちは見せず、
なやめるいましを近くかこみ、
或夜ぞひそかに、産むをも待たず、
なが兒を奪ひて食ひ去りぬ。」

八

「ゆるせや、見ぬ子よ、さりとは知らず——
のろひは免れじ——放ち遣りぬ。
ああ、われ、誰れにかそを訴へん、
神より離れてのぞみ盡きぬ。」

第一、第二の天使よ、來たり、
終末の管をば高く鳴らせ。
汝が手に燃え立つ火焔を浴びて、
わが身も草木と焼けて失せん。

九

「第三天使の喇叭よ、ひゞけ。
御星の菌蕈、とくも隕ちよ。
われ、汝が苦きに身を投げ入れて、
河水もろともほろび行かん。」

ああ、この靈魂とく滅びずば、
いかでかあがなふ深き罪を。
ああ、われ、誰れにかそを訴へん、
神より離れてのぞみ盡きぬ。」

一〇

物云ふ力もおのづとゆるみ、
すがれる横木を落ちん時し、
わが身を受くべき魔鬼等は失せて、
奇くもやわらぐ胸のおそれ。

この時、『しばし』と、この坑 開らけ、
うへより さし來る 光 見えつ。
聖母の 御すがた いと笑ましげに、
わが手 を 取りて そ 熱き なみだ

—

『若葉』は 朽ちしも、その 靈魂 は
なが身 に 活く』とぞ、あはれ、御母。
わが身 は 引かれて みどりの 雲 に、
こゝろ も 軽らか 空 を のぼる。—

二四

ああ、君、わが愛、愛しき愛 は、
住む世 を 異にし、いよよ 増る。
ときわ の 樹かげの いづみを 汲みて、
また 會ふ 時 を し われは 待たん。

二五

(三) ときわの泉

一

物^{もの}みな 新^{あらた}たの いのち を 帯^おびて、
御^み空^{そら}の 上^{うへ}なる 清^きき 住^すまひ —
夜^よなき 國^{くに}には ともし火^ひ つけず、
日^ひは わが かんむり、おもて 照^{てる}し。

十^じ二^にの 星^{ほし}々^々 また、き 止^やみて、
ちさき は 花^{はな}がた、胸^{むね}を 飾^{かざ}る。
わが身^みも 聖^{せい}徒^との 御^み数^{かず}に 入^いりて、
無^む縫^{ほう}の 細^{ほそ}布^{のう} 白^{しろ}き 給^たびぬ。

二

赦^{ゆる}免^しを 受^うけたる を み 凡^{たゞ}て、
こゝには 稚^{わさな}き 愛^{あい}の すがた。
マナ より あまき は その 物^{もの}語^{がた}り、
宿^{すく}世^せの 記^き憶^{おく}は 夢^{ゆめ}の 如^{ごと}し。

等しく 光の 白衣をまとひ、
金沙の 御庭に 群るゝさまは、
たとへば 遠野に あまたの 羊、
かすみて 浮べる 春な に 似たり。

三

あまたの 羊の 飼ひ主、神の
御さかえ 照り添ふ 宮に あれば、
わが身も 溢るゝ めぐみを 浴びて、
楽しき とこ春 晝を 去らず。

たまたま、凝りにし くれなる雲の
花びら 一つを 足に 踏みて、
奇しくも ゆらげる 平和の 袖に、
感ぜし ひびきは 天の あなた。

四

ああ、その響を 追ひ行く 魂の
羽根より 燃え立つ ほのほ 見えて、
わが手に 生命の 樹かげを 汲めど、
なほ且 寂しき 涌きぞ來たる。

上^{かみ}にはみどりのあや虹^{にじ}渡^{わた}り、
下^{しも}にはあを海^{うみ}玻璃^{はり}の男波^{おとなみ}、
その透^すき通^{とほ}れる岸邊^{きしべ}を、ひとり、
心^{こころ}は戀^{こひ}しき君^{きみ}にかよふ。

五

ああ、君^{きみ}、わが愛^{あい}、悲^{かな}しき愛^{あい}の
きづなに引^ひかれて懸^かる地球^{ちきゅう}にや、
ちいさきパール^{パール}の偶像^{ぐざう}の如^{ごと}く、
熱^{あつ}なく回^{めぐ}りて圓^{まる}く垂^たるゝ。

さは云^いへ、宗教^{しゅうきょう}の御光^{みひかり}しるく、
わが目^めに見^みゆるはもとの聖堂^{みだう}、
黄金^{こがね}の香爐^{こうろ}にキリスマ^{クリスマス}焚^たいて、
君^{きみ}、なほいますか——遠^{とほ}き御聲^{みこゑ}。

六

あまたの悔^くいあるもの等^らの爲^ために
十字架^{じゆじか}の道行^{みちゆき}き、彌撒^{みさ}のいのり、
御壇^{みだん}に焚^たく香^かのけむりと共^{とも}に
纖弱^{せんじやく}にのぼりてあめに聽^きゆ。

ああ、その聲こそ一條長く、
風なく顔へて胸にひっけ。
来たれや、わが愛、小鳩の如く、
眞白き御羽根に罪を打ちて。

七

わが手は待つなり、巻くべき君を。
わが身は待つなり、いだく君を。
一たび心にしるせし影は、
いつまで相見ず居らるべきぞ。

亡ぶることなきわが魂ならば、
いつまで空しく過すべきぞ。
御神はゆるさん、心と心、
影また影とし會はん時を。

八

「祈禱のうちにわが愛あり」と、
君はも下界に歌ひ給ふ――
その愛、その君、今幾萬里、
へだつるわが身の聲も聴くや。

「祈禱のうちに生命を寄す」と、
君はも下界に仰ぎ給ふ――
いのちよ、わが君、今幾億里、
へだつるわが身の聲も聴くや。

九

ああ、君、わが愛、悲しき愛は、
主の日ぞ来らば、報得べし。
七の封印六つまで開らけ、
とくそのあめ地消えも行けや。

ちいささバアルの偶像の如く、
熱なく回りに垂るる地球こそ、
その時全くかげなく失せて、
君はも御空に來ますべきを。

血ぬれる鐘

「いかで、おきなよ、われ等ふたり、
花見がてらのおもひ出に、
春もどかの空に高く
古き鐘をば撞かしめよ、
いかで、おきな。」

「いかで、——おるかや、君は酔へり。
さくら 棚引くうらゝ日も、
われは目醒めて、うつる時を
かぞへ居ればぞ、みやこ人、
ほろび 近し。」

聽いて、暫しは、めをとふたり
目をば見かはし震ひしが、
聲もをみなはあだに笑みつ。
「されば、生れも來たるもの

さわに あるを。」

『さなり、生るゝ子等もあれど、

死ぬるものらは歸り來ず。

若き乙女のかほに見えて、

つひに隠るゝいろ香こそ、

これやほだし。』

『これやほだし』と、酔へるをのこ

手もてをみな の肩に觸れ、

『などておきな は斯くも沈み、

あまきさかづき受けやせぬ—

鐘を撞けよ。』

『さなり、刹那は死をば呼びて、

鐘ぞ鳴る時やがて來ん。

若きをのこの胸に燃えて、

つひにひろがるねたみこそ、

これやおそれ。』

「いかで、おきな」と、めをとふたり
撞きに迫れば、その前を
低きうなりの聲ぞ過ぎて、
かれは忽ち夜叉のごと
狂ひ立ちつ。

『待て』と遮ぎるさまにおちて、
かれらふたりは退きつ。

『許せ、おきなよ、無禮げなりき—
こはも何ゆる世には斯く

よき音 出だす。

『さらば、君よ』と、こゝろ解けて、
かれは語れり。「この鐘は—
云ふも苦しや—われに生命、
あはれ、わが戀、わがおそれ、
これやわが世。

「君よ、三十とせむかしなりき、
われは山門—寺をとこ、

妻に親しき小姓ありて、
われは之をば疑ひぬ
若き時ぞ。

「時」の 小姓は 今や 智識、
名ある 御寺を 領すれど、
けがれ無き身の 徳に 照れる
眉間に 傷あり。 — われこそは
罪ぞ 深き。

「妻」は いたはし、 ころに 走り、
此世の わかれを 苦しみつ。
血もて 無罪を この 裏に
しるし終はりて、 われを見き —
斯くは 云ひぬ。

「君は これより われを まもり、
朝な 夕な の 鐘を 撞け。
人に 知らるゝ 時し 來なば、
いのち なき身と 思へよ」と、

これや わが世。

「晝の光を闇につゝみ、

罪の根のみははびこりつ。

わがまぼろしの影ぞ薄く、

響くおとにもおそれあり――

われは老いぬ。

「されど、寂しき脈にさへも

今やむかしの血は湧きぬ。

若きいましのすがた見ては、

またもわが身の春は來ぬ。

こゝろ苦し。

「むしろ死ぬるによきは今日ぞ、

われは最後ののかね撞かん――

低きうなりの聲ぞ來たり、

かれは忽ち夜叉のごと、

狂ひ立ちつ。

「待て」と、身づから 返り見つゝ、

めをと ふたり を ためらひて、

「君はこの場を のがれ給へ——」

わが身 苦む さまをこそ

遠く 聴けや。」

鐘は ひゞきぬ、春の ゆふべ、

花の ふゞきを 散らしつゝ、

鐘は ひゞきぬ、春の床を

酔へる 人らの 歸る時——

かれは 如何に。

「あはれ、お竹よ、けふを 共に

この世 離れん、さらばぞ」と、

一つ 撞きては 胸をもたえ、

二つ 撞きては 身をもたえ、

まろび 伏しぬ。

あくるあしたの 花の夢を
 覚ます ひびきは 聴え来ず。
 あはれ、もろきは 血しほのみか、
 さしも 名高き 唐かねも
 朽ちて ありき。

田戸の海ぬし

一

田戸に 山崎、
 また 堀の内、
 走り水にも、
 また 大津にも、
 春の うしほは
 朝ゆふ 寄せて、

けむる霞かすみの

奥おくより見ゆる、

淡あはき猿さる島じま、

島しまとは云いへど、

田た戸どのおやぢが

巢すにこそ似にたれ。

二

おやぢ、頬ほ赧あかの

かほむき出だして、

鬢びんのほつれ毛け

二すぢ三すぢ、

風かぜにもまる、

小舟こぶねの上うへを、

あさは沖おきより、

岸きしよりゆふは、

かろくあま飛とぶ

小鳥こどりの如ごとく、

しゅっしゅ漕こぐ手ての

手てなみも速はやし。

三

おやぢ、その名は
 猪ノ助ぬしよ、
 海に生れて、
 海をぞ戀ふる。
 妻はあれども、
 また娘はあれど、
 ありしむかしの
 血氣の名残。

ゆるし得ぬ子を
 お濱に抱かせ、
 かれは寂しき
 おもひに浮ぶ。

四

妻のおやぢは
 七九に失せて、
 今はその子も
 死ぬべき時を、

一つ軒端のきはに

おなじの住すまひ、

もとの仲なにも

返かへらば返かへれ、

二十三年ねん

共ともには住すめど、

ひとりびとりの

むしろをしよん

五

上總かづさ、房州ぼうしゅう、

かすみに醒さめて、

曉あけのひかりに

猿島さるじま浮うけば、

おやちの頬ほ赧あかの

かほむき出だして、

またもきのふの

舟唄ふなうたあはれ。

しゅッしゅ漕ぐ手の

手てなみを見みせて、

田戸と島との
わたしを通ふ。

六

過ぎし時代の
ちよん鬘結ふて、
鬘のほつれ毛
二すぢ三すぢ。
おやぢ、もとより
その歳知らず。

問へば、『わが身は
死ぬることなし』と。
浦の人々
うやまひ懼れ、
田戸の海ぬし、
こは、その稱へ。

七

むすめお絹が
世を知らそめて、

父母の仲をば

返すとすれど、

母は寂しく

縫ひ物つゞけ、

「あれは龍宮の

いたづら小僧。」

猪ノも笑みつゝ、

かたへに立ちて、

「されば——汝が父、

身は海坊主。」

高地の靈語

ああ、造化の一角なる

二百零三高地よ、

識あつて待ちしか、この

非情非理の亂り世。

人は文明たへて、

あまき酒にほろ酔ふ。

されど、なれば血に醒め、
闇の如く寂寥。

うちに つゝむ 地熱の

深き光 かすめつ、

ひとり 寒威 零度の

空に 高く そびえつ。

脊には 死屍 かさなり、
谷は 人の 腹わた、

雪に 赤く 染まるは
うちし 敵と その仇。

野犬 ことに 來たりて、
性を 更へし おほかみ、
凍る肉 を 食みても、
誰れ を 恨む この民。

のろひ 多き 罪をば、
嗟、なまぐさく 吹く風。

われは之に乗りてぞ
渡り來ぬる死の畔。

骨と骨の間に

祝ひの種播きたり、

肉と肉の間に

萌ゆる種を播きたり。

百年劫果含めて

あざり行かんその種、

とこしなへに新たなの

生命延さんその羽根。

嗟、再びはのろはで、

風よ、北に舞ひ行け。

われは邊明の靈なり、

西にこそはのび行け。

さらば、高地——わが乗る

駒はひかるあけぼの、

遠く進むすがたを
今ぞ見よや、ほのぼの。

旭日吟

(遊子、故郷の濱邊に立ちて)

(一)

ああ、とこしへの朝日子よ。
緑したる松原に、
あしたの浪をかき分けて、
登るすがたの勇ましき。

われも 初^{はじ}めて、朝^{あさ}がすむ
けしき ぞ いとも 麗^{うる}はしく、
この世^よに 生^うれ來^こし 時^{とき}は、
かくや いきほひ 猛^{たけ}りけん。

ちから 限^{かぎ}りに 泣^なく聲^{こゑ}の
いづる 涙^{なみだ}に うれひ なく、
自由^{じゆう}に めぐる ひとみ には
ちりも 穢^{けが}れ は とゞまらず。

五^ご感^{かん}の もとゐ 明^{あき}らかに、
まよひの 風^{かぜ}の 吹^ふき立^たたす、
母^{はは}の 乳^ちぶさに 口^{くち} 觸^ふれて、
清^きき いのちを 呼^よ吸^きしつ。

いはひ、よるこび、樂^{たの}みの
うちに 育^{そだ}ちし そのさま は、
なが み光^{ひかり}の まのあたり
いや増^ます ごとく ありにけん。

ああ、とこしへの朝日子よ。

緑したる松原に、

あしたの浪をかき分けて、

登るすがたの勇ましき。

われ學問をならひ初め、

ふみ讀む机前にして、

夕べに至るその頃は、
かくやたゆまで勉めけん。

ころもを振ふ千仞の

岡を觀じて意氣高く、

この大丈夫足洗ふ

萬里の流れ身に秘めつ。

人は云ふてふ螢雪の

たとへも愚か、夜更けて、

鳥の啼く音にほゝるみの
かげもの云はゞ、如何なりき。

心のうちにのぞみあり、
身の苦みをことゝせず。
學の道にさちありて、
胸にまどひのひま出でず。

たゞ一すぢにわがちから
進み行く世の樂みは、

なれが日足のすぎすぎに
とよさか登るさまにこそ。

(三)

ああ、さりながら、朝日子も
高きにつれて名を得じや。
ああ、朝日子も曇りなば、
深きあはれの動かじや。

戀と名譽の二すぢに
わが道分れ入りてより、
われ疑ひをいだき初め、
われ悲みを感じ來ぬ。

(四)

われ初戀を知りそめて
若き血しほに觸れてより、
もゆる思はあめつちの

果にも渡るこゝ地しつ。

われには餘る苦みを
詩にも歌にも歌へども、
胸に秘めたる一たまの
たから示さん折失せつ。
その麗はしきをとめ子の
行る追ひつゝ、幾歳か、
嘆く目あてのなきまゝに、

そは 只 おなじ 箱 なりき。

再び めぐり會ふ 日 さへ、

ありし 昔は 語れども、

わが寶 こそ 奥深く

ひそみて 光 なかりけれ。

然れど、ひそかに 取り出で、

放てば、闇も かゝやきの

風 に 吹れて、絶壁 や

高き をとめ の 立てる 見ゆ。

呼べど、答へず。ほゝゑめど、

かれ 喜び の 色 見えず。

ああ、まぼろし か、足引 の

山 の ふもと ゆ 崩れつゝ。

ひらめく 袖 は 薄がすみ

あかき に 消えて うつり行き、

浪立つ 髪 は 青雲 の

白き御空にかげもなし。

ああ、われなやむものなりや、
こゝろの平和絶えてなし。

ああ、わが思深うして、
攫むは熱き夢ばかり。

(五)

われ名を求め求めてより、

空しく爰に年を経つ。
秦の始皇が英略も、
われには靴の塵と見え。

三千宮女亡びては、
野中の花といづれぞや。
万里の城もくづほれて、
下行く水とまたいづれ。

ああ、アルプスの高きより

敵の平野を見おろして、
おのが立ち場の雪を蹴つ、
うちほゝゑみしナポレオン。

ウオータルロー草茂く、

吊ふ虫の音にも聴け。

英雄、ひと日、雲晴れて、

セントヘレナの月如何に。

消えて残るを「名」と云へど、

ありて實なきこれ如何。
老子一たび「無」を叫び、
姿を深くつゝみけり。

ああ、功名にあくがれて、

われは迷ひしこともあり。

頓悟の域に身を入れて、

さると見えし時もあり。

(六)

ああ、疑うたがひの なかりせば、
如何いかに 樂たのしき 世よなりけん。

ああ、悲かなしみの かけなくば、

如何いかに うれしき われ ならん。

さばれ、樂たのしと 云いふ もの、

亡はらび行くべく 定さだまらば、

うれしと 見みゆる その事ことの
つひに 消きゆべき ものならば、

見みよ、夏なつ草くさの 生おひ立たてど、

露つゆの もろきに 就つくごとく、

わが 疑うたがひと 悲かなしみの

長ながきを むしろ いのち なり。

「無限むげん」の 池いけに 石いし 投なげて
面おもに ひろがる さ々なな浪なみの、

一輪 一輪 に 亂れ來て
「われ」てふ ものは 拾ひ得ず。

(七)

ああ、朝日子 よ、とこしへに
若き姿 ぞ 麗はしき。
われは わが身を 求めつゝ、
かくも 心は うつろひぬ。

うつる 心に 且は又
「死」てふ なやみの 加はりつ、
東西 光 うすらぎて、
南北 闇 に 消えんとす。
さびしく 立ちて 夕風の
そよぐ に まかす 墓ならで、
戀も 名譽も 疑も
やすらに 受くる 神 なきや。

(八)

ああ、われ、今や、故郷の
濱邊に立ちてもの思へば、
昔ながらのあけぼのに
わが魂は湯あみしつ。

千重の男波をかき分けて、
静かに登る朝日子よ。

無限の亂れ引きまとめ、
われを圓きに就かしめよ。

伊吹の螢

伊吹山 木々 失せて、

生ゆる 草葉 短し。

夏の 夜風に しめり、

煙草の 火も 冷たし。

けむり 直ぐ 消ゆれども、

消えず 残る 光よ。

時に 後れし ほたる、

あはれ、 重く 飛ぶ 見よ。

さかり は 十日 過ぎぬ、

名ある 宇治 に 石山。

おのが 同士 と 別れ、

いかで 寒き この山。

何に こがれて、 斯る

こゝろ 細き さまよひ。

わが身はじめて愛しき
なれを見たり、この宵。

暗きともし火つけて、

風になやむその様、

ふわり、ふわりと靡く、

二つ三つの人魂。

恨みあるものとせば、

後生の爲め、くよくよ、

こゝにことづてすとや、
わが頭上を渡るよ。

さらば、無言の身こそ、

われに寄するなが骨。

あはれ、露には瘦せて、

高きを慕ふこゝろ根。

螢を踏みつぶせる折に

風かぜに涼すずしき夜よなか、

粟津あはづが原はらのみちへ、

かげも撰あつばでとまる

ほたる、何なんのいけにへ。

病やめるものならば、右みぎ、

ひだり、流ながれもあるを。

廣ひろきまなかに出いで、

犬いぬに食くはる生なまうを。

小ちさきその羽根はね折やれて、

飛とぶに苦くしくば、また、

草葉くさばに逃のがるべきを。

投なげて、蛇へびの腹はらわた。

無駄むだに亡ほろべと、よもや

神かみもつくり置おかざらん。

觸るゝを避けて、ともす
その火、頼む爲めならん。

それも罪なき蟲に、

噫、入らぬ取越し苦勞。

之を憐む味かた、

敵となりしを吊らう。

高きわが下駄の齒に、

松を漏れて生き死ぬ、

月の光を踏まで、

あはれ、なれをつぶしぬ。

雲 翻 々

ああ、翻々として飛ぶ雲の
妙なるさまを仰ぎ見て、
速きあらしの袖漏れし、
わが身の行ゑ思ふかな。

見よ、見よ。
古人も歌ふ「はたて」さへ

ちぎれ、ちぎれて、また別の
形を浮ぶその色や、
濃きを逃れて、風足の
薄き端には光あり。
いや白きそのひかり、
照らすがまゝに染りつく、
一朶一朶に入れかはり、
また立ちかはる、そのかげの
先きを争ひ走れども、

一步はづせば、幾万里
それ 幾万里、青き空。

如何なる 靈の 乗るなれば、
かく 安らかに 渡るぞや。
われは 片羽を うち折りて、
胸に 憩ひの かげもなく、
上に 向ひて あせれども、
あせる ほど、遠ざかる。

ああ、手は 亡び、足 亡び、
からだは 亡び失する 時、
雲よ、ながごと、白妙の
のぞみや われも 分ち得ん。

常世の光

(ガリユツクの『ダイヤナ讃歌』の曲に合わせて新たに作れる)

あめ地 初めて 二つ に 分れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光。
とこ世 の おもて を 籠めたる 闇 は、
音なく 破れて かゝやき渡り、
四隅 は 新たに くらゐ を 定め、
よろづの物 皆 生命 を 浴びぬ――
あめ地 初めて 二つ に 分れ、

御空 を 踊りて 照り出でたる 光。

静けき とこ闇 おのづと 破れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光、
御神 の 夢 より 漏れたる 笑みの
くらき が 中を や かゝやき渡る。
物 皆 新たに 形状 を 受けて、
生命 の 流れ は 四隅 に 振ふ――
あめ地 初めて 二つ に 分れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光。

ねむりは醒めたり

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、
千歳 つたはる 御稜威を 仰げ。
けはしき 山々、するどき 流、
どよめく わだつみ、かすめる 野原、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日本を。

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、

二千代 重なる 榮え を 開らけ。

家國の うれひ も、その わづらひ も、
われらが 希望も、はた いきほひ も、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日本を。

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、
三千とせ 鍛へし 歴史を 振へ。

世界の 文明なやめる ひまに、
われらが 理想も、はた 藝術も、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日本を。

進むは生命、拓くはいのち、
皇祖の御教へそのうちにあり。
一つの言葉に不易の御門、
國是の發展この民にあり。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日本を。

われらが日に日に求むるものは、
劔にあらざる御靈の光。
常世を貫くちからに依りて、

仁義の寶を亞細亞に護せん。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
三千とせ鍛へし歴史を振へ。
世界の文明なやめるひまに、
われらが理想も、はた藝術も、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日本を。

ソ

子

ト

(三十二篇)

一 海の響

夢はおぼろの花の如く
咲きて見ゆれば、冬の床も、
ゆふべ寂しき海を出で、
龍の宮居の玉座なりき。
ねむり、南にかしら沈め、
沈むかしらに香ぞかゝる。
肌につめたき絹のさわり――

これや寐ざめのかをり遺す。

ひとりあたゝか胸のうれひ、
臥して、聴ゆる濱をたどり、
ものゝに酔ひたる乙女すがた、
いともしなやか浪ぞ寄する。
あはれ、かくこそ死にも入らめ――
海のひゞきよ、永劫のおもひ。

二 無言の石

云はず、語らぬ石をいただき、
われはこの世を泣きに泣きぬ。
人のいふなる戀にあらず、
おのが受けたる苦にもあらず。
苦にも、戀にも更らに増して、
胸のさびしみあふれ來なば、

もゆる思ひの肉は焼けて、
なみだばかりぞ熱く流る。

われに神なく、且は死なく、
ありといふべきこのかなしみ、
今や生命の糧となりて、
つきぬわが世は石と共ぞ。

かれは「無言」を絶えず生めば、
われはなみだをそゝぎ繼がん。

三 自然のあゆみ

岩をめぐりて行くは何ぞ、
河つ姫にや、河つ男にや。

音は立つれどすがた見せず、

見せぬすがたの裳裾觸れて、

こゝに白ぎぬあとを引くや。

行けよ、流れよ、はやき水の

澄みて盡させぬ深き道を――

自然のあゆみも斯くぞあらん。

われは物もひ立ちて居れば、

目には静かのかげも浮きて、

身さへもろ共岩をめぐり、

隠れ去るらんこゝちすなり。

岩をめぐりて行くは何ぞ、
河つ姫にや、河つ男にや。

四 残る憂ひ

われは 高き 磯邊の

岩に よりて 黙せり、

遠つ海の 疾風の

音に、日さへ かげれり。

こゝろのみぞ、この胸

深く 照らす 眞帆船。

馳ける 道に 一すぢ

残る うれひ 悲み、

白く 曳いて 消え行く

天靈の 跡ぞ 身に入み、

われの 顔ひ おのゝく

肉を 破る 寂しむ。

あはれ、 立てよ、 わが魂、

なれの 領ぞ この濱。

五 細き指輪

ほそき 指輪ゆびわ の ぬし は あらん、
君きみ は 御手みで をば 固かたく まもり、
大理石だいりせき もて 成なれる 如ごとく、
人ひと の 觸ふる、を い避け給たまふ。
うべや、ゆかしく 歌うたふ 譜ふには、
高たかき しらべの 籠かごる 見みえて、
海うみ の 四方よちより 渡わたる 風かぜも

こゝに 合唱がしやう の あまつ樂座がくざ。

君きみよ、御空みそらに 戀こひは すとも、
しばし 真砂まさこの 上うへに 坐すはれ。
春はるの かげろふ は ゆく 燃もえて、
白しろき砂すなにも 熱あつは あるを――
いづれ 卷まかるゝ 身みにし あらば、
來きたれ、ひとしく あつき 胸むねに。

六 夢の子

あはれ、わが身の戀を云はゞ、
色は紫紺のとばり深く、
奥は紙燭の火かけ暗く、
胸のほのほの燃ゆる上を
すぐる夢の子——あとを向きて、
『来たれ、いまし』と、ひそか聲の
なほも小暗く、深き奥に、

身をば糸もて引くに似たり。 一一七

されど、覺むれば、朝のひかり
窓にわが身のねむり吸ひて、
いとも樂しき夜間のおもひ
晝はかわける世こそわぶれ。——
君にあかるき定命ありて、
われはこそしもうつし得じな。

七 薰ゆる火かけ

ともし火もてるは如何なる子ぞや。
闇夜のあらしにゆらぎて立てど、
なほ且その影大地に投げす。
照らすは世の様、世の有様の
奥なるほるびと、そのかなしみと、
沈めるいのちの流れと愛や。
常世を つかぬく 光の するの、

漏れ来て、あたりにくゆるよ、火かけ。

聖なる御堂の神壇に載れば、
或は教職キリスマ焚いて、
十字架を導く脊なにも照らん。
さは云へ、こはまた移しも得じな。
ともし火もてるは如何なる子ぞや、
闇夜のあらしにゆらぎて立てり。

八 とほの寂しみ

夢に地獄を深く探り、

奇しきともし火われは得たり。

ほのほ、うれひの色に照りて、

あをき光は死をぞ招く。

聖き御山の堂に燃えて、

世々に傳はるその如く、

永劫のさびしみこゝに引きて、
暗くそのかけゆるゝのみぞ。

すゝろ運びて、此世に取れば、

活けるそよ風照りを増しつ。

佛龕の御佛いのち映えて、

われはおのつと台掌なしぬ。

夢はさめたり | されど、いまだ
君はわが身にいのち投げず。

九 檉の木

傳教大師が印度の地より
得來てし檉の木、根を一もとの
枝葉は高さたかに繁りてあれど、
その幹かみなかばも、その根ねのもとも、
寂しや、分身わかれの若芽わかめを斷ちて、
たとへば英雄えいゆう子こなきが如く、
天台教理てんたいきょうりを絶する如し。

藏、通、別、圓、四教のうちに
三千寺坊さんぜんじぼうのかけさへ消えて、
今はた**いづく**に昔むかしを訪はん。
大師だいしが入淨にんじやう以來いらいのをしへ、
高きたかを遺して、利機りきをば生うます。
あはれや、檉ていの木、御山みやまにひとり、
法燈ほふとう暗くらきを護まもるに似たり。

十 小暗き道

われは 夢見ぬ 君とふたり、

つらき 無言の裏を いただき、

胸の奥なる熱に 觸れて、

深き 真洞の底に 落ちつ。

うすく ほのめく 燈火影に

前の御かほぞ いかにか、あはれ

いとも 白けて、ねむる いきも
既に 絶えたる 身ざま、死ざま。

膝につめたき むくろ一つ、
重き呼吸は 身にも 迫る。
上を 仰げば、黒き石の、
『罪』と 叫びて、おほひ下たる。

さなり、わが魂、これを 避けて、
なほも 小暗き 道を 戀ふる。

十一 まとふ怖れ

われは 夢見ぬ 海の上を
君と 二人し 蛇に 巻かれ、
舟と もろ共 深み空の
あをき 最中に 吞まれ行くよ。

力ある 胸浪と どよみ、
熱き こゝろは 雲と 振ふ。

われに 君こそ 斯くて あらば、
まとふ おそれの 何か あらん。

舟や かたむけ、 潮よ 来たれ、
なほも 海へび かたく 巻けよ。
おなじ 燃え立つ 火焰 あげて、
吞めよ、 下せよ、 沈む 身等を

あはれ、 安かれ、 君の かげは
われぞ 死までも 送り行かん。

十二 うれひ一すぢ

鐵てつのうるしを練ねりし壁かべと
固かたくとちたる、闇やみを破やぶり
曉あけの光ひかりの照てらす如ごとく、
わが身み胸むねよりつらぬかれて、
いなく希望のぞみはけふも亡はろび、
うれひ一すぢ流れ去さりぬ。

ながれ去さりにしうれひなれど、
またも覺さむれば、またも來きたり、
沈しづむこころの目めには見みえて、
遠とほく地平ちへいの線せんに渡わたる。
君きみはかくこそわれを引ひきて、
ひろきこの世よの野邊のべに住すむや。
われに流ながれて入いるか、去さるか—
うれひ一すぢ、今いまはいのち。

十三 時劫の森かげ

時劫じこくの森もりかげ 露つゆはしとゞ、

わが おほ御神みかみの足あしを受うけず、

重かさなる 落葉おちばの 下した行ゆく 水みづは、

岩いをば めぐりて 人ひとを 刻きむ。

小暗をぐらき うちより かしら 見みえて、

無言むごんは その世よを つゝむ時ときし、

重かさなる 落葉おちばの ゆらぎと 共ともに、

延のびたり 大だいなる 右みぎ手てと 左ひだり手て。

身みづから その手てを 樹きには かけて、

見みよ、 立たち上あれり 石いしの すがた。

あらくれ男おとこの 胸むねいと 廣ひろく、

常世とこよの 風かぜをば こゝに 汲すひぬ。

ああ、かれ、戀こひなく、 苦くみなくに、

はじめて この世よに 出いでんと するか。

十四 いさゝ聲

重く垂れたるおのが髪を
取れば、「母よ」といさゝ聲の
脊なをめぐりて、膝に下たり、
酷きこゝろの目には見えて、
兒等のうす影胸を纏ふ。
打てど、拂へど、數を知らず。

神のアバドン、蝗率ゐ、
爐なるけむりに涌くが如く、
宿世來世の風に乗りて、
つぎへつぎへと群るゝ影に、
おそれおのゝく、寂しゆふべ。
かれはをみなと生れ出で、
産まず、生れぬ刹那追へど、
なほも等しく産の苦あり。

十五 鍵を與へよ

鍵を 與へよ、陰府の 鍵を。
いづれ 死ぬべき もの、身もて、
われは あめなる 門を 戀ひす。

あめに 空しく 君を 入れて、
清き 天使を 見なん よりも、
あめに 空しく 君に 連れて、

清き 天使と ならん よりも、
われら 諸共 身をば 投げて、
暗き 真洞に 沈み行かん。

鍵を 與へよ、陰府の 鍵を。
われら いち度も 二度も 死にて、
胸の うれひを 深うしなば、
雲の 消えては 見ゆる 如く、
戀の 記憶ぞ 朽ちず あらん。

十六 鏡を碎けよ

鏡かがみを碎くだけよ、わが姉あね、妹いもうと、
映うつれるすがたは皆みな穢けがれたり。
世よに戀こひありとは心こころのまよひ、
振ふり袖そで重おもきを左手ひだりてに取とりて、
その身みの穢けがれを飽あくまで泣なげや。
なが夫つま、なが戀こひ、なが依よるはしら、
いづれも右手みぎてには遠とほきを引ひいて、

近ちかきは夜よるの戸と、空むなしきむくろ。

仇あだなる小夢さゆめに酔よひたるこの世よ、
誰たれをか恨うらみん、をみなの魂たまよ。
酒さけの香か高たかきに口くちづけすとも、
醒さむればあしたのむくろとむくろ。
鏡かがみを碎くだけよ、わが姉あね、妹いもうと、
映うつれるすがたは皆みな穢けがれたり。

十七 蛇の河姥

むかしこの石天を落ちて、
此世の小春に目をば覺めぬ。
へびの河姥之を慕ひ、
うろこ輝く腕に巻きぬ。

石は泣く泣く羽がひ折りて、
水に投ぐれば、右の羽根は

瀬をばのぼりて鯉と浮び、
折れし左は鱒と下だり、
落つるなみだは一つ毎に
ちさき尾ひれの数を産みつ。
年にいち度は、眷属すべて
こゝに過ぎ行く世をぞのろふ。

秋の月夜を深く覺めて、
聴けよ、宿世の『われ』や如何に。

十八 熱き眞砂

熱き 眞砂の上を撫で、
われは 獨りし物を思へば、
遠き 深みの波浪は 打ちて、
手なる 下より ひゞき來たる。
おのが 小胸も 爲めに 振ひ、
千々の 亂れは 濱の小砂利。

なれよ、小砂利よ、ひろき海に
幾代 打たれて、斯くや 圓き。
なれを 讀みつゝ、ひろひ行けば、
ひとつ ひとつに 光添へて、
經にし代をこそ われに 語れ。
あはれ、海邊の 熱き砂利よ、
此世は 萬年 永く 繼げば、
われも いたしの 年に 添はん。

十九 酒興

注げや、わが愛、今一ちよくを。
明日は酒興の來べきを知らず。
ふたりこの日を、手に手を取りて、
こゝに歡樂満つれば満つる。
誰れか酒の香あましといふや、
なれがいろ香も褪す時あるを。
さなり、けふのみ、たゞこの刹那、

われは心に自由を得たり。

天を呼ぶ君、地を撃つわが身、
しばし短きいのちに酔はん。
明日は、醒むれば、またこの愛の
おなじ味はひ得べしや。君よ、
時劫、見えざる鎖を曳いて、
われは悲哀に繋がる身なり。

二十 悲哀の俘

酒に 向へど 憂愁は 去らず、
取れる 盃なみだを 湛ふ。
こゝに 酔へるは わが肉のみぞ、
いづこ 如何なる 心の糧よ――
遠き 奥より かなしみ 曳いて、
君よ、わが身は 悲哀の 俘。
失せし 戀とな かまへて 問ひそ、

胸の 苦悶を 刻むは 久し。

この世 なつかし、この世は 憎し、
これや われのみ 醒めたる こゝろ。
いづれ 亡ぶる この胸、この身、
私慾 私憤に 敵あるべしや――
遠き 奥より かなしみ 曳いて、
君よ、わが身は 悲哀の 俘。

二十一 苦悶の鎖

(故野口寧齋君に)

ああ、君、苦悶をいだいて逝きぬ、
わが身はなほそを胸にし生くる。
生くと死ぬるは、例へば影の
その身に添へると添はぬに似たり。
父母より受けたるこの世のもだえ、
一息毎にもいのちを刻み、
その音天地の間に落ちて、

久遠のさゝ波その輪をひろぐ。

ああ、君、その輪のひろがるなべに、
底なき記憶の淵にや沈む。
わが手を延ばして救ふとすれば、
残るはまぼろし——苦悶の鎖。
延び行くその端、君、今陰府に、
われ他の端をばこなたに握る。

小叙事
脱營兵

二十一 脱營の事
...

はしがき

先に同じ學窓に學び、後に同じ藝術に従事すれども、生と其方面を異にして、専ら音樂に熱心なる北村季晴君よ。生はこの叙事小曲を君に献す。わが國現今の状態に在りては、その作曲並に演出の上より、直に歐西の歌劇又は音樂劇の如きものを望むの到底不可能なることは、君も平生之を口にするところ。之に志あるものは、先づ、詩樂共に、易きより始めざるべからず。この曲、また、僅かに中幕物に價するもの、且、唱歌者の勞を省く爲め、普通のせりふを加へ、また、叙事の文句をも入れたり。舞臺にのぼる唱歌者の稀なる今日のことなれば、男聲女聲の獨唱も、長きところは、機に應じて、その中間の一部を、叙事の文句と同じく、樂座の合唱となして可也。願くば君、之を嘉納せんことを。

明治三十八年五月

著者識。

一五〇

一五一

脱營兵

(本舞臺、中央にアーチ形を構へ、その内は凡て凄愴たる墓場、月夜の景。下手、アーチ形の側に、樂座の設けあるべし。)

樂座(合唱)

小夜吹く嵐もねむりに入りて、
奈落の孤寂を招く頃、

並み立つ石塔荒れにし庭を
照らすは月かけ——人の影。

(脱營兵、おづおづ登場。)

脱營兵(獨白)

ああ、營所をこゝまで逃げては来たが、心
はわしといふ身體を逃げることは出来ない。
——今日、國元から手紙が来て、開けて見
れば、女房が二人の兒を遺して死んでしま
つたと——その上、永年世話になつた、義

理ある母の大病。二人の兒はどうして居る。
村のものと云つては、いづれも、揃ひも揃
つて薄情な人ばかり。不斷から、わしの家
を穢多同様に取り扱ひ、——とても、世話
を見て呉れやう筈はなし。——これは、御
國の爲めには悪い事と知つては居るが、兎
や角の心配から、透を見て、營所を逃げて
来たもの、——あとはわしが自訴して出る
とも、また、百萬の軍隊でも出来ない奇功
を、わし一人で作つて死なうとも、それは

わしの決心一つにあるのだ。——ああ、それにしても、胸がどきまぎして、もう、今から地獄にでも落ちて居る心持がする。この物凄い墓場は、たゞ無言で、わしを笑つて居るやうだ。もう、かうなつては、頼るものは神、佛、ばかり。——どうか、神さま、佛さま、暫くわたしが自由を許して下さいませ。お袋の様子さへ見て、安心が出来ますれば、この身体は粉末微塵になつてもよろしうムい升。頼み升、頼み升。——

ああ、何だか胸が苦しい。——それはさうと、この邊に尋ねて来た墓のある筈。——
—— おお、之が女房の埋つて居るところか。——
—— お民、もう、會ふことは出来ないのか。子供を残して死んだ上に、今、お袋の大病。わしは御國へ對して濟まぬことだが、營所を逃げて、こゝまで歸つて来たわい。情けないことになつて呉れたなア。—— おお、向ふを來るは何者。——

樂座(合唱)

その影 あり とは 知るや 否や、
足音 ぞ ひそみて 進み來る—
罪ある者 をば からめ取る と、
惡魔 の 一隊 か、はた 追ひ手。

脱營兵(白)

やア、こは不思議の怪物ども。——どこかに隠れて、やり過して呉れう。

(と、隠れる。)

樂座(合唱)

死を さながらの 深き夜に、
出て來たりけり 魔鬼の 群—

これや 羅刹。

(どろ／＼にて、覆面黒衣の怪物、數名登場。そのうちの頭領、運命神、奇なる杖を以て他を差圖し、脱營兵の隠れ居るを示めす。)

樂座(合唱)

天網 のがれ難し、
運命、人を のろふ。

(脱營兵、恐れおのゝく。怪物、無言にて、之を引
き出す。運命神の杖、鬼火を發す。渠、之を差し
延ばして、その尖をまわせば、脱營兵くるく
るまわる。)

運命神(獨唱)

影よ、影よ、
闇を人は食ふ影なり。
黒き杖の人は影なり。

ちから 結びて、

われは ころに

汝をのろはん。

劫風、毒龍、ラルロ。

(杖を以て印を結びて。)

樂座(合唱)

杖もて印を結べば、
先づ露兵現はる。

(露兵、二名現出。運命神、消ゆ。)

露兵一

やア、こは日本兵。

露兵二

何、日本兵が――

(兩兵、左右より脱營兵を蹴る。)

露兵一

われらは日本軍の爲めに殺され、遂に冥途へ送られたが、

露兵二

今、呼び戻されて、来て見れば、こゝに憎き日本の兵士。

露兵一

さいはひ、意氣地のない様子――

露兵二

こゝが最も良い仕返し時――

一、二

綱を以てしばつてしまへ。

(脱營兵、縛せらる。)

樂座(合唱)

その奇しき綱には、
千斤の魔力あり。
その重き繩目に、
人、手さへすくみたり。

露兵一、二

えい。

(と、また蹴り倒す。)

樂座(合唱)

家なる妻には會はで別れ、
恩ある老母はやまひ篤し
營所をのがれて歸り來てし
心はさすがに優しけれご、
あはれ、御空を落ちし鳥、
胸に傷持つ苦しきよ。

露兵一

何をもがくのだ。

露兵二

そこ動くな。

(と、また左右より蹴る。)

脱營兵

やア、黙つて居れば兎や角と——目の黒い
間は、この身も日本帝國の軍人だぞ。

露兵一、二

何だ、この死にそこない奴が。

(また蹴る。)

脱營兵

ちよい。

(と、立ち行かんとすれば、身は後ろ手、どろく
にて、運命神、また現はれ、結べる印を解けば、露
兵消ゆ。これより段々、月光暗くなる。)

樂座(合唱)

本意なき 繩目 に 引き繋がれて、
ひそかに ぬぐへる 涙の まなこ——

月 さへ曇りて 小暗き この場、
ためらふ 前には 老母の御かほ。

運命神(獨唱)

劫風、毒龍、ラルロ。

(また印を結べば、どろくにて、老母の幻影、
現出。運命神、消ゆ。)

脱營兵(白)

おお、母上――

老母幻影(獨唱)

あけ暮れ 鎮守の神に詣で、
祈りし 願ひは いまし 故ぞ。
わが身は 年波 安く 越えて、
この世を 今こそ 渡り來ぬれ。
先祖の家の名をば
かまへて 穢す勿れ。

脱營兵(白)

それでは、母上は、もう、あの世へ―― 申し、
申し、母上――
(どろくにて、運命神、また現はる。)

運命神(獨唱)

ラルロ。

樂座(合唱)

見る見る 變りて、妻のすがた。

(どろくにて、老母の幻影、妻の姿となる。運命神、消ゆ。)

脱營兵(獨唱)

おお、お民か

子等を如何に。

妻の幻影(獨唱)

朝ゆふ 食事の席に坐はり、

いのりし 言葉は 君が爲め。

二人の子等をば 夜るの火かけ、

寂しき 孤獨を まもりたり。

御國の爲めに 盡し、

功蹟を 示めし 給へ。

脱營兵(獨唱)

さばれ、二人の子等は 如何に。

樂座(合唱)

ああ、わが妻よと近づけば、
また現はれし運命神。

(どろくにて、運命神、現出。妻の幻影、あとす
さりして、消ゆ。)

運命神(獨唱)

天網のがれ難し、
運命、なれをのろふ。

(神、また杖をまわせば、脱營兵、くるくまわ
る。月光、明るなる。)

脱營兵(獨唱)

あはれ、老いたる母に別れ、
なほも妻にはあざけらるゝ。
今朝のたよりを受けずあらば、
もとの心は續くべきを――
敵は満洲にあらず、
妻子ぞほだし。
あはれ、如何なる天魔入りて、
斯くやわが身を迷はしむる。

運命神(獨唱)

そこに 無言の 教へ あり、
そこに 無形の つるぎ あり。
切れや、こゝろ を 繋ぐ 綱を。
解けや、その胸 照らす 文字を。

脱營兵(獨唱)

われは 營所 を のがれ來たり、
ああ、神にも、佛にも、
この胸、この身 は、見捨てられしか。

樂座(合唱)

解けや、その胸 照らす 文字を。
切れや、心 を 繋ぐ 綱を。

脱營兵(獨唱)

この胸 ———— この綱 ———— この身 ———— この手。

(怪物、すべて出て來たり、脱營兵の上に向ち
群がり、運命神の杖につれて、大くまわる。大
どろくにて、舞臺を眞暗にし、更らに營所
の門前を現はす。)

番兵(獨白)

今のは夢であつたか。

樂座(合唱)

身をもて國を護る、
死すともおそるべしや。

(夜中行軍の一隊、號令に従つて歸り來たる。
番兵、直立、之を迎ふ。喇叭の音にて、幕。)

悲戀悲歌 終

44. p. 124.
津戶三

明治三十八年六月七日印刷
明治三十八年六月十日發行

複製
不許

著
作
者

岩野美衛
東京市芝區四久保八幡町九番地

發
行
者

日高藤兵衛
東京市本鄉區元富士町二番地

印
刷
者

山本邦彦
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印
刷
所

日本印刷株式會社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發
行
所

東京市本鄉區
元富士町二番地

日高有隣堂

定價金參拾五錢

悲戀悲歌與附
郵税金四錢

大 賣 捌

- | | | | |
|------------|-------|---------------|-------|
| 東京市京橋區尾張町 | 警 醒 社 | 鹿兒島市松山通り仲町 | 久永新藏 |
| 東京神田區表神保町 | 東 京 堂 | 筑後久留米市 | 菊竹書店 |
| 東京神田區裏神保町 | 上 田 屋 | 静岡市 | 吉見書店 |
| 東京日本橋區箱屋町 | 前 川 | 横濱市 | 弘 集 堂 |
| 東京京橋區南傳馬町 | 目黒書店 | 同 | 勉 强 堂 |
| 東京神田區表神保町 | 修 學 堂 | 前橋市曲輪町 | 煥乎堂書店 |
| 大阪心齋橋南久太郎町 | 福 音 社 | 越後國水原 | 西村六平 |
| 大阪南本町座摩ノ前 | 杉本書店 | 新潟古町 | 西村支店 |
| 大阪備後町四丁目 | 吉岡平助 | 越後長岡 | 覺張次平 |
| 京都三條寺町 | 聖 書 房 | 金澤市片町 | 宇都宮書店 |
| 京都二條寺町 | 若林書店 | 高岡市守山町 | 學海堂書店 |
| 甲府市柳町壹丁目 | 大塚柳正堂 | 福井市佐桂枝中町 | 島川書店 |
| 甲府常盤町 | 阪本温故堂 | 信州長野市大門町 | 西澤喜太郎 |
| 水戸泉町 | 川又銀藏 | 信州松本本町 | 松 榮 堂 |
| 野州足利町一丁目 | 青木書店 | 信州諏訪町 | 日 進 堂 |
| 廣島市 | 積 善 館 | 仙臺市新傳馬町 | 紀 港 堂 |
| 岡山市岡山町 | 奧田金昌堂 | 仙臺市大町五丁目 | 藤崎書店 |
| 周防國岩國町 | 白金日新堂 | 陸中一ノ關町 | 佐藤喜年 |
| 山口大市町 | 同 支 店 | 陸奥弘前市十手町 | 今泉道太郎 |
| 高知市種崎町 | 澤本書店 | 青森市米町 | 同 支 店 |
| 熊本市新町二丁目 | 長崎次郎 | 秋田市茶町 | 成見清兵衛 |
| | | 北海道札幌區南一條西二丁目 | 富 貴 堂 |

高橋五郎著

杜伯品藻

定價卅五錢
郵稅六錢

トルストイ伯の人物主義を評す
一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致す
トルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること
或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世
界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人
物を四方八面より縦横論評し玲瓏玻璃屋に
住する如し其媼妍得失一目瞭然真理の爲に
之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評隲す
る而已ならんや○讀書子愛讀の榮を賜へ



新体夕潮

潮

定價三十五錢
郵稅六錢

文學士 大町桂月先生書翰 木村憲太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 前田林外先生書翰
岩野 泡鳴著 青木繁先生書
著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏し
て、うちに無窮の悲觀を備ふる而してその
行文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、
沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、
苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥
想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、



茅原華山編纂

白田亞浪、平野劔客、菊島濤陰、野田花子、田路てる子筆録

我 と 人

定價貳拾錢 郵稅六錢

本書は世間の好評を博したる『向上の一路』生命一昧篇を別冊と爲したるものにして萬朝報の黒岩先生を始め天龍、天山、柏軒、白蛇、松葉、掬汀、銀月諸氏より森槐南、姉崎嘲風、成瀬仁藏、菊池群藏、内藤鳴雪、佐々木信綱、湯本武比古、三宅克己、徳永柳洲、齋藤松洲、井口あぐり諸家の談論文章を筆録したるものなり、柳は緑、花は紅、是書を読めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

* * * * *

月刊雜誌 (毎月十五日發行)

基督教講壇

定價一部 拾錢 郵稅一部 五厘

●半年分金五十八錢一ヶ年分金壹圓〇六錢
●切手代用一割増一切前金の事
本誌は東京にある各學生及市青年會聯合の編輯にかゝるものにして教派の異同學説の相違に關せず都下と地方とを問はず現代基督教界に立つて福音宣傳の任に當れるあらゆる大家の説教を網羅し眞に能く生命の麴麵となり靈活の根源たらんことを期するもの也



4980
75